『エドゥアール・グリッサン　〈全-世界〉のヴィジョン』（岩波書店、2016）

中村隆之

エドゥアール・グリッサン（1928-2011）をご存知でしょうか。カリブ海マルティニック島に生まれた、フランス語圏を代表する作家です。グリッサンは、難解な作家の部類に入ります。詩のみならず、小説も難しい。その意味では玄人受けをする作家だといえそうです。

本書は、グリッサンの文学的営みに接近し、作家の全体像を描こうとする試みです。「彼の「黒い肌」と、彼の書くものとのあいだには何か関係があるのか。出身地であるマルティニックとはいったいどのような島なのか。彼の母語はフランス語なのだろうか。どのような作家に影響を受けたのか。そもそも、なぜ書くのか」。こうした問いに取り組むために、本書は書かれました。

副題にあるとおり、本書は〈全-世界〉（Tout-monde）という語をキーワードに据えています。この語は作家が晩年にみずからの世界観を示すものとしてしばしば用いたものです。〈全-世界〉というヴィジョンに近づいてみることが、上記の問いを解く鍵にもなります。

本書を書くときに最初にイメージしたのは、旅です。グリッサンは、自分たちの先祖が横断した大西洋に思いを馳せ、自分たち「プランテーションの民」がアフリカからの切断から生まれたと考えます。その起源はアフリカではなく奴隷船の船底に求められます。根源的な暴力から生じたこのプランテーションの民の大航海、その「帰還なき旅」を、グリッサンは「開かれた船の旅」と呼びます。私は、本書を、この「開かれた船の旅」のイメージから、どうしても始めたいと思いました。つまり、この本を読むことじたいが、プランテーションの民が形成され（奴隷制時代）、自分たちの世界が消失したのちに（奴隷制廃止後から海外県時代）、〈全-世界〉に向けて当てどない彷徨を始める（現在）、グリッサンの描くカリブ海の人々の数世紀の歩みを辿る旅となることを願いました。私にとって、グリッサンの文学的営みを辿り直すということは、カリブ海の民の歴史的経験を想像上で追体験することでもあるのです。

グリッサンが形作る風景のうちには、海があり、山があり、森があり、町があります。起伏に富んだその風景は、どの経路を辿るかによってその都度変わった様相を見せます。「読むことは旅すること」（ル・クレジオ）だと信じています。